

卯の花の里だより

歌碑除幕に思う

市川 琢也

昨秋十一月三十日、加藤鈴鹿市長、佐佐木幸綱先生、宇都宮とよ先生などご出席のもと、信綱生誕百三十年を記念して、生家前の一隅に建立した歌碑の除幕式を行った。

歌碑は生家周辺の雰囲気と調和させるため、御影石とし、高さも百十五センチに抑えたものとなっている。

刻まれた歌は、生家が再移築されるより二十年前の昭和二十五年十月、信綱先生が七十九歳の時、最後に石薬師を訪れて詠まれた

目とづればここに家ありき奥の間の机のもとに常より
し父

である。この時信綱先生は、市制八年記念で市の招請や父弘綱翁の碑前祭への出席のため来られたのであるが、ご自分の年齢のこともあってか、郷土への思いも強く、多くの歌を詠まれており、「鈴鹿行」としてまとめられている。



生家前での除幕式

碑歌はその一つである。

信綱先生は、足代弘訓に師事して全国的にも著名な学者であった父弘綱翁から、「早く自分の持つすべてを授けたい」という強い願望のもとに、幼少より漢籍の素読などの特別の英才教育を受け、学校卒業後は、共同で研究するなどしており、生涯を通していろいろの機会に、父への感謝、思慕の言葉を残されている。

この歌にこめられた父として生家への思いも格別のものであったと思われる。私たちも、歌碑の前に立って信綱先生のその姿を偲びたい。

碑歌は、令孫幸綱先生に無理を言って、豪快そして芸術性高く書いていただくことができた。先生には特別のご厚意によって、毎年、顕彰歌会の選者となるとともに、講演に由来ももらっている。石薬師の地に弘綱先生、信綱先生とともに、幸綱先生のお名前を刻むことができ、大変意義があったと喜んでいいる。

主たる財源は、福岡市山本泰子様のご芳志である。顕彰会としてあらためて感謝したい。

(佐佐木信綱顕彰会会長)

佐佐木信綱資料館だより
第十七号

目次	
ある地方歌人の近代	高倉 一紀
展示室だより	磯上 知里
信綱一首	村田 邦夫
卯の花の里だより	市川 琢也

ある地方歌人の近代

「佐々木弘綱年譜」から

高倉 一紀

佐々木弘綱(一八二八〜一八九一)は信綱の父で、幕末維新时期に活躍した伊勢国(三重県)鈴鹿郡石薬師の歌学派国学者。この弘綱の日記、「佐々木弘綱年譜」(以下「年譜」と略す)翻刻の機会を得たのは数年前のことである。そこには、近世と近代・個人と国家・文学と政治・伝統と欧化といった様々な要素がせめぎ合い、錯綜するかのようない日常があった。国策としての急速な近代化が推し進められ、国民国家の建設が至上命題となった維新时期。彼は伝統的な学芸の世界に身を置き、この変革の時代と如何に向き合ったのか。そんな視点から、「年譜」を中心に壮年期の弘綱を素描しておきたい。

明治元年(一八六八)、弘綱四十一歳。その後の彼が歩んだ道は、同年新設の官庁神祇官に結集した国学者達とは違っていた。交流のあった同学が、上京して次々と官途に就くなか、たびたびの勤めにもかかわらず、彼は遂に官に

入ることはなかった。

和歌の浦にわれだに一人のこらずばくちはてなまし玉
ひろふ道
かな
和歌の浦に老を養ふあしたづは雲の上をもよそに見る

の歌に象徴されるように、あくまでも民間にあって和歌の道に専心することを自らの使命と考えた。そこには、和歌の伝統を絶やすまいとの並々ならぬ決意が窺われる。また、「官尊民卑」の風潮が浸潤し、「立身出世」こそが人生最大の目的となりつつある世相の中で、それは時世俗流への、したたかな抵抗の現れであったともいえる。

そんな弘綱を反骨の伝統主義者ということに異論はない。ただし、その反骨の士が、一方では状況に対する意外なほどの柔軟さを兼ね備えていたことも忘れてはならない。

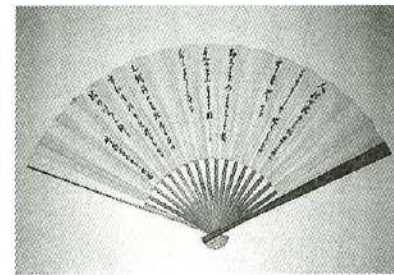
「年譜」には、信綱五歳の誕生日に、当時まだ珍しかった洋服をわざわざ取り寄せて着せてみたり、西洋の家具や調度を調べ、部屋に舶来の装飾品を飾るなど、そんなハイカラな一面も覗かせる。また、太陽暦採用の布告があった明治五年、この年の十二月三日をもって明治六年一月一日と

改められると、彼は次のような歳旦の歌を詠む。
めづらしな月さえ日さえあらたまりたる三のはじめは
なれきつる習に冬のこゝちして春としもなく春はきに
けり

改暦に伴う多少の違和感を感じられるものの、何とも淡淡とした対応である。太陰暦による季節の移ろいに、敏感な感性を磨いて来た当時の歌壇や俳壇にあって、弘綱のようにすんなりと改暦を受け入れる者は少なかった。

さて、こうした営みの向こうに、彼は何を思い描いていたのであろうか。人々の意識が専ら政治や国家の問題に傾いた明治初頭、和歌は「丈夫の業にあらず」「小事也」といわれることさえ珍しくはなかった。長男信綱のような歌壇エリート育成も、そんな時世に投じられた一石と見ることが出来るだろう。とはいえ、弘綱最大の関心事がエリート養成にあつたかという点、必ずしもそうではない。逆に、広範な民衆への和歌の浸透と、作歌人口の拡大こそ、彼が最も重視し、力を尽くすところであつた。その志は、『類題千舟集』をはじめとする一連のアンソロジーの編集として実現される。多くの無名歌人を含む全国歌人の作品を募り、これを編集して刊行。民間和歌を集積すると共に、人々の作歌意欲を喚起した。『千舟集』には、一二五七八、七九三八首の歌が収録され、一人一人の作者名簿が付載されている。また、『明治開化和歌集』に見られるような新題の積極的な採用も、アマチュア歌人の増加につながつた。時勢に流されることなく、また旧弊に陥ることもなく、

その目指すところは、民衆に広い裾野を持つ、新たな明治歌壇の創成にはかならなかつた。同時にそれは、真の国民文学としての和歌の復権を願うものでもあつた。そんな弘綱のしたたかで、またしなやかな生きざまにこそ、本物の近代を垣間見たような思いがする。
(皇學館大学文学部助教)

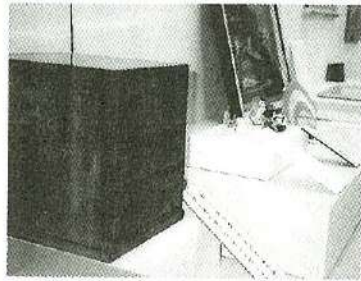


信綱の自筆で次の三首が書かれた扇子が寄贈されました。
人の世のさかへおとろへ
よそにして波はちとせの
ひき也けり ①
しろこまのしろきたて髪
春かせにみたるゝなして
なみよせかへる ②
み越路の春のやよひの
雪なたれそれおもほゆる
波のいろかな ③

竹柏会あるし信綱

信綱が誰のために、いつ頃扇子に書き込んだか不明ですが、三首とも『心の花』明治三十二年八月号の「大磯百首」中に出てくる歌です。信綱は二十八歳の夏、避暑のため家族一同で大磯へ行きました。「谷あいの家であつたが、近くに清い泉が湧き出ておつたので、朝とくいては静かに歌を思い」ながら、得たのが「大磯百首」でした。その中

の「浪を」と題が付けられた五首あるうちの三首です。
①の歌は『心の花』明治三十五年一月号の付録として、また同三十六年の第一歌集『思草』にも収録されているので、この時期の信綱にとって自賛歌であつたと思われる。②の歌は第一歌集には入れられず、昭和三十一年『信綱歌集』の「思草」で①の歌とともに収録されています。③の歌については、なぜかどの歌集にも収録されなかつたようです。同時期に詠まれた歌なのですが、その後は様々です。
* * *



西片町時代の信綱先生を偲ぶ資料が寄贈されました。その中から、先生の人柄がよくわかるエピソードとともに「引き出し」の紹介をします。先生が長年にわたって愛用していた引き出しでしたが、結婚のお祝いにと渡辺(旧姓笠原)ヨシ氏に贈られたものです。

ヨシさんは昭和九年から約八年間、先生の身の回りの世話を

しました。初めて先生の屋敷を訪ねた時、ヨシさんは十六歳。先生は「そうですか、十六ね、小さいですね。まあ今晩泣かずにいられますかね」と微笑んだそうです。また「ヨシには一番先」といってお土産を渡すなど、先生には大変かわいがられました。

そのヨシさんが結婚のため、帰郷することとなりました。先生は「実はね、お前を帰したくなく、いつまでも二人の側においてほしかったんです。でも女の子には結婚という大切な時期があるのでこればかりは仕方がないでしょう」と泣いたといひます。最後の挨拶をしたヨシさんが部屋を下がろうとすると、「ちょっと待ちなさい。これも持って行きなさい」と呼び止められ、そして側にあつた引き出しの中身をその場に全部空けて、「新しい物を買ってあげるよ。わりわしが使っていた方が思い出になつていいでしょう」と、手渡されたそうです。

他にも螺細細工入り盆一点、短冊三点、色紙一点、旅行先のお土産類五点、アルバム一点、書籍一点の寄贈を受けました。只今、展示室にて公開させていただいております。

【参考文献】「本郷西片町の思い出」渡辺ヨシ

(学芸員 磯上 知里)

信綱一首・17

万葉の道の一道生のきはみ

踏みてもゆかむこころつつしみ

昭和十五年(一九四〇)刊『瀧の音』所収

昭和十二年四月二十八日、第一回文化勲章が最年長の長岡半太郎から最年少の佐佐木信綱まで九人に授与された。先生は六十六歳、国文学者としての業績に対してであった。佐佐木信綱の詩も学も人もこの一首に凝集したような、全心力を傾けた正述心緒の名歌である。
(村田邦夫)

『新訂 佐佐木信綱先生とふるさと鈴鹿』より